

法政大学学術機関リポジトリ

HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-01-16

【書評】 笠原賢介『ドイツ啓蒙と非ヨーロッパ世界：クニツゲ、レッシング、ヘルダー』未来社、二〇一七年：もう一つのドイツ啓蒙

SUGASAWA, Tatsubumi / 菅沢, 龍文

(出版者 / Publisher)

法政哲学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

HOSEI TETSUGAKU : BULLETIN OF HOSEI SOCIETY FOR PHILOSOPHY / 法政哲学

(巻 / Volume)

15

(開始ページ / Start Page)

65

(終了ページ / End Page)

68

(発行年 / Year)

2019-03-30

【書評】

笠原賢介『ドイツ啓蒙と非ヨーロッパ世界——クニツゲ、レッシング、ヘルダー』未来社、二〇一七年

もう一つのドイツ啓蒙

菅 沢 龍 文

本書で取り上げられるクニツゲ、レッシング、ヘルダーによる十八世紀後半のドイツ啓蒙は、十八世紀前半のヴォルフとヴォルフ学派や同世紀後半のカントの啓蒙哲学が理性を中心とした体系的思想を究めていったのとは、一線を画している。クニツゲについては『人間交際術』が取り上げられ、十八世紀に人々の間で盛んに行われた社交がドイツ啓蒙に重要な意味を持ったことが語り出される。レッシングについては『カルダーヌス弁護』が取り上げられ、異端者とされるカルダーヌスを弁護することのなかに見出される、偶像崇拜者、ユダヤ教徒、キリスト教徒、イスラーム教徒の間の融和という宗教的寛容をめぐる啓蒙について考究される。ヘルダーについては『イデーネン』が取り上げられ、偶然が織りなす「迷宮」としての歴史観や、人類の

全体が自然とのかかわりの中で絶えざる「変容（メタモルフォーゼ）」の中にあるという歴史観が浮き彫りにされる。つまりこれらにより本書のテーマを纏めると、社交・宗教・歴史にかんする一八世紀後半の、いわばもう一つのドイツ啓蒙と呼んでよいと思われる。

しかしこのように単純に纏めるとスッキリするかもしれないが、実は本書の醍醐味はそのほるか先にある。クニツゲについては、カント、ルソー、シュライアーマッハー、レッシングとの連関のなかで社交の観点での人間存在のもつ意味の考察が進められる。レッシングについては、ピエール・ベールの『歴史思想史辞典』からの影響関係を実証的に考察することで、レッシングの寛容思想の立ち位置が明らかにされる。ヘルダーについてはベールとゲーテか

らの影響関係のなかでその思想の意義が解明される。つまり、それぞれの思想が他の思想家とのどういいう影響関係のなかで生成したのか、が実証的に子細に明らかにされる。そこから浮かび上がるのが、十八世紀後半のもう一つのドイツ啓蒙の重要姓である。

それではこのもう一つのドイツ啓蒙はどういう意味を持つのか。ヴォルフ学派やカントによる十八世紀のドイツ啓蒙は、理性的な自己意識をより所にして人類の視点で語るといふ意味で、ヨーロッパばかりか非ヨーロッパをも超えると言えよう。これに比べると、本書で取り上げられているもう一つのドイツ啓蒙は、いわば理性が世界を平らげるといふのではなくて、理性によって「非ヨーロッパ世界」を承認するという姿勢に特徴がある。これは換言すれば、複数主義（多元主義、プルラリズム）である。その複数者の関係は「偶然」に支配されるし、歴史もまた人知を超えた「迷宮」である、ともう一つの啓蒙は捉える。こういったことを、本書は原典テキストを通じて教えてくれる。

これで本書のもつ重要な一面が図式的に分かりやすくなったであろう。しかしもちろん、こんなことで本書の醍醐味が尽きるわけではない。それは本書の末尾資料にサイモン・オックレー（一六七九年～一七二〇年）の『サラセン人によるシリア、ペルシア、エジプトの征服』（英語原典）

の独訳本からの抜粋が入っていることに象徴される。レッシング自身が用い、「Ockley aus einer geschriebenen arabischen Geschichte des heiligen Landes (オックレー、アラビア語によって書かれた聖地の歴史より)」（二三五頁）と注記している本の正体は従来分からなかった。それを本書は突き止めて、その中の、イスラーム勃興期の有力な指導者アブー・ウバイダによる手紙文を資料としたのである。しかもその箇所にはアラビア語原典の写本（エドワード・ポーコックが収集し、オックスフォード大学のボードリアン・ライブラリー所蔵となった）を基にしていることが示されているのである。つまり、その手紙により、「片手に『コーラン』、片手に陰」ではなくて、異教徒に『コーラン』か「税」かの選択を迫ったのがイスラームだ、というレッシングのイスラーム像が、アラビア語原典にまで遡る明確な典拠によって裏付けられていることが分かったのである。

これは歴史的探究であつたかもしれない。さらに本書では思想探究の面でもやはり原典テキストに依拠した重要な指摘がなされる。それを象徴する一例としては、歴史哲学にかんするヘルダーとカントの論争のなかで「幸福」概念を巡って生じた行き違いを明らかにしたことが挙げられる。それは、ドイツ語の Glück（幸運）、Glückseligkeit（幸

福)、*Seligkeit* (至福) の区別に関わる。ヘルダーは『イデー』第二編第八巻の五のなかで、「幸福という名称がすでに、人間は純粹な至福を享受できないし、そのようなものを創り出すこともできない、ということを示唆している」(二一四頁) というように、「幸福」と「純粹な至福」を区別している。そして一方では「幸福とは内的な状態であるから、幸福の尺度と定義は、「各人の胸の」外にはなく、各人の胸の内にある」(同頁、「」は評者の挿入) と語っていて、他方でその一〇頁ほど後になる第八巻の五の最後の箇所では「各人はその至福 (*Seligkeit*) の尺度を自分自身の内に持つ」(二一七頁の注22) と語る。ところがカントがこの「至福」とある同所を「幸福」に変えて引用して、「幸福」と「至福」との使い分けを「無視」(同所) したうえで、タヒチ島の「安らかな怠惰」を礼賛しているものとしてヘルダーを批判している、という事実を本書は突き止めたのである。^{*}

ところが、「やめる、もうたくやんだ (*ohé, iam saís est!*)」という言葉は、カントが『人倫の形而上学』の「徳論」でホラティウスから引用したものであるが、このときカントはドイツ語での儀礼的な敬称の多さを嘆いている。クニツゲの『人間交際術』はもつとあからさまに「身分秩序や貴族の特権を自明視する考え方」を批判する、という

ことが指摘される (六三三頁参照)。そして本書は最後にこの言葉を思い返して終わっている。これとは別の意味だが、紙幅も尽きたので、書評子が「もうたくさんだ」と思われる前に拙文を終えるのが適切だろう。拙文に付き合わせた諸兄に感謝しつつ。(了)

* ヘルダーはカントが引用した箇所の段落で、次のように語る。「幸福 (*Glückseligkeit*) が地上で見出されるのならば、感情をもつ存在者すべてに幸福はある。それどころか、この存在者には自然 (*Natur*) によって幸福があるにちががなく、楽しみのために (*zum Genuß*) 助けとなる技芸も、その存在者の自然となるにちがいない。ところでここでは、各人は自分の至福の尺度 (*das Maas seiner Seligkeit*) を自分自身の内に持つ。つまり、人間は形態を身にまとい、その形態向きに形成されたのであり、そしてその形態の純粹な輪郭の中でのみ仕合わせ (*glücklich*) となりうる。まさにそれゆえ自然は地上におけるあらゆる人間形態 (*Menschenform*) を汲み尽くした。それは、それぞれの人間形態の時代にそれぞれの人間形態の場所、自然がそれぞれの人間形態にとっての楽しみ (*Genuß*) を手にするであろうがためであり、この楽

しみでもって自然は死すべき者を、その生涯を通じて
惑わしたのである」。この文脈での「自分の至福」は
「純粹な至福」ではなくて「幸福」と解した方が分か
りやすいと思われる。ちなみに田中・川合の翻訳書で
はここを「福祉」と訳して、他での「天福」という訳
語を用いていない。ヘルダー著『歴史哲学』田中萃一
郎、川合貞一共訳、第一書房、一九三二年、四八八、
四九七頁を参照。